

「巡査の居る風景」について

鄭 舜瓏

一、はじめに

1. 「巡査の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ——」（以下は「巡査の居る風景」と称する）は昭和四年六月に、一高の「校友会雑誌」に発表されたものである。
2. 「巡査の居る風景」の性質は明らかに他の習作や中島の前期作品と異なり、〈社会批判的な性格〉が著しい。それゆえ、「巡査の居る風景」は〈植民地政策批判的な〉、〈帝国主義批判的な〉作品だというふうに評価されがちになる。本稿では「巡査の居る風景」における〈社会批判的な性格〉について再考したい。

二、疎外者の造型

主人公の趙は植民地の被支配者である朝鮮人でありながら、支配者側の体制の一員としての巡査でもあるというような矛盾を抱えた存在である。彼は周りの人々から衝撃を受け、アイデンティティの問題を考え始める。

彼は電車の中で、日本人女性に「ヨボ」と呼ばれたくない青年についてこのように考えた。

何故此の青年はあんな争論をするのだ。この穏健な抗議者は何故自分が他人であることをそんなに光榮に思ふのだ。何故自分が自分であることを恥ぢねばならないのだ

注意しなければならないところは趙の注目する点が「ヨボ」という差別語の使い方ではなく、青年が自分を朝鮮人であると認めたくないという点である。差別問題よりも、「朝鮮人」という符号がほかの朝鮮人の考えと同一化できなくなることのほうを怖がっている。

府会議員の選挙演説の中で、趙は自分を光榮ある日本人と信じている朝鮮人候補者を見て、次のように考えた。

それからもう一度日本といふ国を考へて見た。朝鮮といふ民族を考へて見た。自分といふものも考へて見た。

併しその重苦しい圧力が何処から来るかといふことに就いては、彼はそれを尋ねようとはしなかつた。いや、それが怖かつたのだ。自分で自分を目覚ますことが恐ろしいのだ。

趙は自己を覚醒させることを恐れながらも、自己を考えることから逃避しなかつた。

趙は高官らしい紳士に道を聞かれたとき、おもわず卑屈な様態を表した。そのことを悟った彼は次のように反省する。

これは俺の一人の問題ではない。俺達の民族は昔からこんな性質を持つやうに歴史的に訓練されて来て居るんだ。

趙は自分の正体を見通すかわりに、民族という大きな枠で自己をその中に隠している。趙にとっては、それを最後の答案と認めるわけにはいかない。その後、趙を徹底的に覚醒させる事件が起こる。総督を暗殺する者が現場で趙に捕らわれたときのことである。その暗殺者は趙に捕られた瞬間、趙を見つめて、「絶望した落着きと憐憫の嘲笑とが浮かんで居る」。そして、趙は「捕はれたものは誰だ。捕らへたものは誰だ」と自分に問う。

最後の段、趙が巡査の職務を辞し、道端に寝ている朝鮮人の群れの中に頭を突っ込んで泣くところで話が終わる。

趙は日常の出来事から他人の考えを推量し、疑問を呈しながら、自己を問い直す。目の前の一切のことが元のように当たり前と認められなくなった時点から、趙は疎外者になる。そこから、趙は自己を求め始める。

趙にとっては、朝鮮人と呼ばれたくない電車の中の青年と議員選挙の候補者は、自分の価値観と相違し理解できないような存在である。趙はその差異を怖れている。歪んだ社会の価値観の中で、趙は朝鮮人であることも、巡査であることも、もはや他の朝鮮人と共感できなくなる。このような「自己を求める疎外者」という造型は、後の作品に出てくる三造（「カメレオン日記」「狼疾記」）、悟浄（「悟浄出世」「悟浄嘆異」）、李徴（「山月記」）の中からも見出される。

藤村氏は「遍歴を出る前の悟浄の姿」と似る「行動する前の趙の苦悩」が、中島を惹きつけ彼を主人公にした原因だと考えている¹。「悟浄出世」は昭和十四年から書き始めたもので、「巡査の居る風景」と十年の隔りがある。その十年の間に「カメレオン日記」「狼疾記」「北方行」などのような過大な自意識が横溢する作品が次々と出来上がる。その点から考えれば、趙の「行動する前に苦悩する」というイメージよりも、「自己を求める」「疎外者」という造形のほうが中島にとってより惹かれるものであったのではないだろうか。

三、断片的な風景

1. リアル、冷静、客観

李英哲氏は「この作品は「スケッチ」という方法で、植民地の風景の中に一見複雑に「混淆」している支配／被支配の対立関係を明確にし、そこに被支配者である朝鮮人の姿を浮き上がらせる構造を持っていた」と指摘した。

この作品では数多く下層民衆の生活様相を主題の周辺に配置している。天秤棒をかつぐ支那人、肺病やみの売卜者、膝から折れたいざりの乞食、腕をまくって注射する福美（金の友達）、路傍にしゃがんで小便する男、捨てたまま石ころの様に眠っているチゲなどがあげられる。しかし、中島は路傍の人間達を描く時、沿道の普通の風景のように描いている。つまり、語り手や主人公と交流がないような存在のように描いている。

作中では屍骸・悪臭・寒さについて、以下のようにリアルに描写する。

屍骸

- 1 敷石には凍った猫の屍骸が牡蠣の様にへばりついていた。
- 2 道傍には捨てられた魚の鰓が赤く崩れ、日蔭の雪溜りの上には生々しい豚の頭が嘔り散らされて居た。
- 3 毎朝、数人の行き倒れが南大門の下に見出された。彼らのある者は手を伸ばして門壁の枯れ切った蔦の蔓をつかんだまま死んで居た。

臭い

- 4 屋内では人々は、溝から上る瓦斯の様な葎と、蒜で腐った空気を彼等の不健全な肺臓に呼吸して、辛うじて生きて居た。

寒さ

- 5 一九二三年。冬が汚く凍って居た。
- 6 身体の中で心臓の外はみんな凍死して了って居る様な気持ちだった。

中島は道にあふれている臭い、凍りつく寒さ、屍骸についての描写をリアルに描いた。このことからまず確認できるのは、たしかに中島は、民衆の生活苦に視線を投げかけていたということである。しかし、その視線は客観的、冷静的に出来上がったものであった。惨めな場面を感情を入れずに描くことによって、かえって一種の冷酷さが感じられる。この冷酷さからは、「巡査の居る風景」を書いている時の中島には、民衆の叫びへの同情、あるいは植民地に対する批判意識が薄いと判断できるのではあるまいか。

2. 葉山嘉樹の「淫賣婦」との比較

上述の視線をプロレタリア作家葉山嘉樹の「淫賣婦」の一段と比較したい。

然し今はもう総てが目の前にあるのだ。

そこには全く残酷な画が描かれてあった。

ビール箱の蓋の蔭には、二十二三位の若い婦人が、全身を全裸のまま仰向きに横たわっていた。彼女は腐った一枚の畳の上にあった。そして吐息は彼女の肩から各々が最後の一滴であるように、搾り出されるのであった。

彼女の肩の辺から、枕の方へかけて、未だ彼女がいくらか、物を食べられる時に嘔吐したらしい汚物が、黒い血痕と共にグチャグチャに散ばっていた。（中略）

そして、頭部の方からは酸敗した悪臭を放っていたし、肢部からは、癌腫の持つ特有の悪臭が放散されていた。こんな異様な臭気の中で人間の肺が耐え得るかどうか、と危ぶまれるほどであった³。

両者の相違点は次のようにまとめられるだろう。

「淫賣婦」のほうは

- a. 主人公が（或いは語り手が）惨めな場面を見ているとき、「残酷な」「こんな異様な臭気の中で人間の肺が耐え得るか」というような、主観的な感情を重ねている。
- b. 描写された人、物は話の主要な軸線に占められ、主要人物と交流している。
- c. 一つの暗い物事に集中的に視線を投げつけ続けて述べる。（これに対して、中島のものはスケッチ的である。）

プロレタリア向けの作品を書く時、下層人民の生活上の苦痛を読者に同感させようとするならば、「淫賣婦」のような描写法でないと、その目的は達成されな

いであろう。「巡査の居る風景」における下層人民の描写は、あくまでも冷静である。このようなスケッチ的な手法での下層階級の描写は、この作品の〈社会批評的な〉性格を薄めているのではないか。

そういうわけで、筆者は「巡査の居る風景」の中のスケッチ的手法は、李氏の指摘するような「支配／被支配という対立関係」を明確にする機能を果たしているとは考えない。冷酷なまでのスケッチは、この作品の社会批判的という性質を薄めていると考える。

一方、下層階級の様相が「スケッチ」的な位置に置かれていることは、中島のこの作品とプロレタリアの作品とを区別するポイントになる。中島は植民地の体験と観察に基づいて、たしかに意志的に下層階級へ視線を投げかけた。しかし、その視線はまだ作品のテーマの位置にまで達していない。このことは、中島にとっては社会の問題よりも「自己」の問題の方がずっと関心が有り、重要性をもっているということも意味しているのではないか。

四、結論

1. 主人公の趙は自己を求める疎外者というように造型された。その疎外性は中島の性格（自意識過剰）と家庭背景（愛が薄い親子関係）と関連があるかもしれない。
2. 他の作品で疎外者とみられる人物として、三造、李徴、悟浄が挙げられるが、早期習作の「巡査の居る風景」の中の趙からすでにその雛形が見出される

と考える。

3. 「巡査の居る風景」における下層人民のスケッチ的描写は、感情の高まりをとまなうプロレタリアの作品の描写と比べて、はるかにリアルで、冷静で、一種の冷酷ささえ読み取られる。その点はかえってこの作品の〈社会批判〉的性格を薄めていると思われる。

参考文献

1. 中島敦『中島敦全集』筑摩書房 2002年5月
2. 藤村猛「中島敦「巡査の居る風景——一九二三の一つのスケッチ」論」『安田女子大学紀要』2002年2月
3. 李英哲「「中島敦「巡査の居る風景——一九二三年の一つのスケッチ」について——「他者の発見」——」『日本文学論叢』28（法政大学大学院）1999年3月
4. 葉山嘉樹「淫賣婦」青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/cards/000031/files/397_21662.html

注

1. 藤村猛「中島敦「巡査の居る風景——一九二三の一つのスケッチ」論」『安田女子大学紀要』2002年2月
2. 李英哲「中島敦「巡査の居る風景——一九二三の一つのスケッチ」について——「他者の発見」——」『日本文学論叢』28（法政大学大学院）1999年3月
3. 葉山嘉樹「淫賣婦」青空文庫 http://www.aozora.gr.jp/cards/000031/files/397_21662.html

てい しゅんろう／台湾大学日本語学科大学院 大学院生三年生